

〔古事談六  
亭宅諸道〕大入道殿姫君○超庚申夜、脇息ニ寄懸テ令死給畢、仍彼御一門ニハ、女房之庚申。永被止云々。

〔榮花物語二  
花山〕正月〇天元に庚申いできたれば、東三條殿の院の女御○超子藤原の御かたにも、むめつぼの女御○證子藤原の御かたにも、わかき人々、としのはじめの庚申なり、せさせ給へと申せば、さはとて御方々みなせさせさせ給、おとこ君たち、この女御たちの御はらから三所ぞおはします、いとけうある事なり、いとよし、こなたかなたとまいらん程によもあけなんなどの給て、さまぐの事どもして、御覽せさせ給に、うたやなにやと、心ばへおかしき御かたぐのありさまよりはじめ、女房達、ごすぐろくの程のいどみも、いとおかしくて、この君たちのおはせざらましかば、こよひのね、ぶりさましはなからましなど、きこえおもひて、たびく鳥もなきぬ、院の女御、あか月がたに、御けうそくにをしかりて、おはしますま、に、やがて、御とのごもりいりにけり、いまさらには、人々聞えさするにはかなきうたども、聞えさせ給はんとて、このおとこ君たちや、ものけたまはる、いまさらになにか御とのごもる、おきさせ給はんと聞えさするに、すべて御いらへもなく、おどろかせ給はねば、よりて、や、ときこえさせ給に、ことのほかに見えさせ給へれば、ひきおどろかしたてまつり給に、やがてひえさせ給へれば、あさましうて、御となぶらとりよせて、見てまつらせたまへば、うせさせ給へるなりけり。

〔枕草子五〕ある比、かうしんせさせ給て、内大臣殿○伊周藤原 いみじう心まうけさせ給へり、夜うち更るほどに、題出して、女ばうに歌よませ給へば、みなけしきだち、ゆるがし出すに、宮の御まへ一條皇后定子に近くさぶらひて、○清少納言物けいしなど、こと事をのみいふを、おとゞ御らんじて、などか歌はよまではなれゐたる、題とれとの給ふを、さる事承りて、うたよむまじくなりて侍れば、思ひ